

国家公務員の国際機関等への派遣体験談

氏名 : 橋本 怜弥 (はしもと りょうや)
現在の所属・職名 : 経済協力開発機構 (OECD)
貿易農業局・農業政策分析官
派遣元省庁 : 農林水産省
派遣期間 : 2024年10月～2027年9月 (予定)
派遣時の最終学位 : 農学博士 (Ph. D.) ・コンピュータ解析
及び公共政策学修士 (M. S.)

<略歴>

2016年4月、農林水産省入省。農林水産技術会議事務局、農産局、内閣官房日本経済再生総合事務局、米国留学 (シカゴ大学) などを経て、2024年10月よりOECD貿易農業局で農業政策分析官として勤務。



Question 1 OECDに派遣されることとなった経緯について、教えてください。

農林水産省では多くの国際機関や在外公館のポストが省内公募されています。私が今いるOECDのポストも省内掲示板で公募されていたところ、この機を逃すまいと応募し、面接等を経たうえで派遣されることになりました。

もともと私は大学で分子生物学を専門としており、入省時、自身の専門性を活かせる部署への配属を希望していた一方で、国際機関での勤務は全く頭の中にはありませんでした。ありがたいことに希望通りの配属部署だったところ、その業務の一つにOECDの作業部会対応がありました。そこで各国の担当者や専門家とやりとりする中で、「こんな世界があるのか」と強く興味を持ち、国際機関での勤務を意識したのを覚えています。しかし、それまで海外での在住経験や留学経験もなく、私の英語力 (特にスピーキング) はおおよそ実務レベルではありませんでした。また、当時 (今もですが) 機械学習研究が非常に盛んに行われ、日進月歩で新モデルが開発されており、データ分析や政策応用の観点からコンピュータサイエンスを学びたいとも考えていたところ、人事院留学制度を利用し米国へ留学してこれらのスキルを学びました。結果として、これらのスキルは現在のOECDでの業務に非常に役立っています。

Question 2 選考プロセスについて、教えてください。

まず省内選考 (書類提出、面接) が実施され、その過程で複数人が残されます。その後、OECD側からの筆記試験とOECD側の課長級含む複数の職員からのオンライン面接があり、その過程で一人の派遣者が決まります。

Question 2 選考プロセスについて、教えてください。（続き）

面接は30分程度でした。ポストにより質問は変わるとは思いますが、私の場合は農業政策の分析指標であるPSE（Producer Support Estimate）とその応用、農家へのスマート農業の実装政策、機械学習モデルの実装経験などでした。OECD側の筆記試験も面接も想像していたより専門性が高く、必死に回答したことを覚えています。

OECDに着任したとき、面接対応を行った職員から「君のコンピュータサイエンスのスキルでやってほしいプロジェクトがある」と言われ、人事院留学制度で留学させていただいたことに深く感謝しました。

Question 3 着任にあたり苦労した点について、教えてください。

私が所属しているのはOECDの貿易農業局という部署ですが、実際に働いてみて非常に専門性が高いと感じます。私は日本の農業政策について知見はありましたが、EUの農業政策（CAP）についてはあまり詳しくなかったところ、EU加盟国の農業政策分析も一部担当することになり、キャッチアップに苦労しました。着任初日にOECDの建物に入るとそのままチームミーティングに招かれ、CAPの個別政策のラベリング基準に関する議論がはじまり、恥ずかしながら全くついていくことができませんでした。しかし、そのような私に同僚は後で丁寧に解説してくれ、とても助かりました。別件で各国への質問票を送るためのオンラインツールを探していた時も、同僚が別の部署の担当に快くつなげてくれたり、その担当の方も非常に丁寧に使い方や注意点を教えてくれました。苦労も多いですが、周りの方々は非常に優しく、そのおかげでやっていけていると感じます。

Question 4 OECDの仕事の特徴や担当した業務の内容について、教えてください。

上司から「OECDの一番の役割は何だと思う？」と聞かれたことがあり、私は分析や政策提言のレポート作成の印象があったので、そのように回答すると、「違う。レポートはあくまで各国の議論を助ける補助的なものだ。国際会議の場で各国間のコミュニケーションを促し、大きな政策の方向付けをし、世界をより良くするのがOECDの役割だ」と話していました。実際OECDには多面的な機能があり、人によりその価値は変わるとも思いますが、世界を俯瞰的に見た仕事の仕方はOECDの特徴だと思います。

私が担当している仕事は大きく3つあり、1つ目はPSE等の評価指標を元にした各国の農業政策分析レポート（M&Eレポート）の作成で、日本、韓国及びスウェーデンを担当しています。2つ目は農業分野におけるデジタルガバナンスに関するプロジェクトを進めており、各国に対して農業データの取り扱いに関する法規制の有無やスマート農業実装に関連して実施している政策を質問票形式で情報収集、分析、レポート執筆を行っています。

Question 4 OECDの仕事の特徴や担当した業務の内容について、教えてください。（続き）

3つ目は農業分野におけるイノベーションの評価手法に関する検討とレポート執筆です。イノベーションの考え方は幅広く、すべてを網羅的に定義し数値化することは困難ですが、企業データベース（ORBIS）や特許データベース（PATSTAT）を元に、特定分野の企業・特許を自然言語処理により抽出し、その特徴を分析しています。

また、OECD加盟国に限らず、部署としていろいろな国への政策提言を行っています。以前、同僚がエジプトの農業・食料政策分析をしていたときに、日本の学校給食制度について聞かれたことがありました。エジプトでは栄養不足と栄養過剰という一見相反する問題が同時に発生しており、子供の栄養対策のために日本の学校給食制度を例として政策提言に盛り込みたいと言っていました。それまで意識していませんでしたが、確かに日本の給食は栄養バランスがとれていたなと思い返し、日本を離れて得られる気づきも多いです。



筆者二列目真ん中。M&Eレポート2025完成に際しチームで記念撮影

Question 5 派遣を通じて得たことや、派遣経験を今後どのように活かしていきたいかについて、教えてください。

派遣を通じて得られたことの一つに、英語による業務遂行力の向上があります。例えば、農業分野におけるデジタルガバナンスのプロジェクトを進める際、各国のガバナンスシステムを調査すること自体は決まっていたましたが、具体的な内容や手法は決まっておらず、その内容は自分で考え、周囲と調整する必要がありました。もちろん、資金拠出国や上司の意向もありますが、プロジェクトに対して恐ろしいぐらいに自分自身に裁量がありました。

また、デジタルガバナンス関係のプロジェクトは別の科学系の部署も推進しており、そことの所掌範囲を調整する必要がありました。

Question 5 派遣を通じて得たことや、派遣経験を今後どのように活かしていきたいかについて、教えてください。（続き）

プロジェクトの範囲を定めるペーパーをドラフトで用意し、それを元に関係部署との調整、OECD内での幹部からの承認、そして国際会議の場で各国からプロジェクトの承認を得て実際の調査の実施など、本省でやっていたような業務をすべて英語でこなす必要があり、その力は着任前に比べて非常に上がったと思います。イノベーション評価指標におけるプロジェクトでも、「イノベーションの評価手法を検討する」こと自体は決まっていたのですが、何をどうするかは決まっておらず、データベースの探索やデータ処理・分析方法の提案と実行に苦労しました。

また、OECDにおける業務を通じて得る知見は、国内では得難いものだと思います。私はスマート農業をはじめとする最新技術の研究開発・社会実装に特に関心がありますが、関連して各国がどのような法規制を持ち、政策を行っているのかなど、大量の質問に対して貴重な情報を各国政府から提供してもらえるのはOECDならではの感じます。

OECDでの経験を踏まえ、農林水産省に戻った後は、「技術×国際」という軸でキャリアを歩めないかと考えています。例えば、農林水産省では農業分野における温室効果ガス排出削減技術の海外展開支援策や、海外現地での新技術のフィージビリティスタディなど多様な政策を実施しており、関連する部署や機関で自身の経験をもとに貢献できないかと考えています。複数回海外赴任する職員も珍しくなく、本省と国際機関を往復するキャリアも面白そうと思っています。

Question 6 将来的に国際機関への派遣を希望する職員へのメッセージをお願いします。

私は入省時は国際機関を自分からはるか遠い存在とと思っていましたが、省内には人事院留学制度を含めいろいろな支援体制があり、それらを使って自分のキャリアを形成していくことも可能だと感じました。また、省内の国際機関の公募ポストを見ていると、若手用のポストもいろいろ用意されています。

OECDでの業務は本省にいたときの業務と大きく異なるものですが、本省で培った経験（いろいろな関係者を巻き込み了解を得つつ物事を進める力など）はOECDでも有効だと思いました。同僚との交流でも、「このような生き方や考え方があるのか」と新鮮な気持ちになり、OECDでの勤務は非常に貴重な機会だと感じています。これは余談ですが、ドイツ人の同僚に、「日本では晩御飯は暖かい食べ物を食べると聞いたけど本当かい？」と聞かれ、「何を聞いているんだ？」と思いましたが、ドイツでは夜は冷たい食べ物（チーズやハム）で済ませることが多いらしく、所変われば品変わり、日々新たな発見で楽しいです。

もしご関心があれば、ぜひ国際機関への派遣を検討していただければと思います。